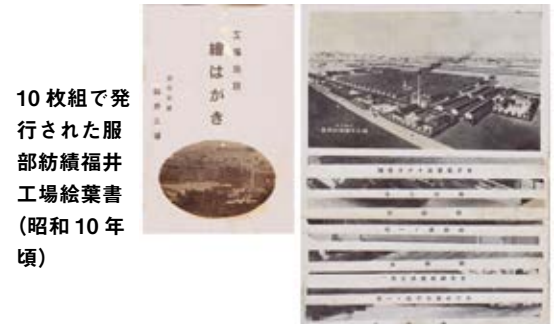


## 服部紡績福井工場

絹織物王国福井の中で綿織物で貢献



10枚組で発行された服部紡績福井工場絵葉書(昭和10年頃)



服部紡績女子工員のラジオ体操風景(昭和10年頃)



服部紡績福井工場(織布部門工場)風景(昭和10年頃)

「服部紡績福井工場」は、福井の古老には懐かしい名前だ。正式には「株式会社服部商店福井紡績工場」といい、現在のフクイボウ(株)(桃園町)の敷地とほぼ同じ場所にあった戦前の大工場である。なお、現在のフクイボウ(株)とは関係はない。

明治中期から飛躍を遂げた福井の羽二重織物は、大正期に第一次世界大戦の好景気を境に不況へと転じた。その打開策の一つとして、綿織物への関心が高まったが、県内の織物業に占める割合は1%程度にすぎなかった。それでもこの時期、綿織物を目指す動きが見られた。

有力な織物業者であった松島清八

もこれに応じ、「福井紡織」を設立した。創立は大正5年3月で、資本金は20万円だった。松島が社長に就任し、谷口宇右衛門、久保久兵衛、森広三郎などの有力者が役員に名を連ねた。工場は市内郊外の立矢口の石場畑方(現桃園町)に建設され、200台の豊田式織機が設置された。同年9月に操業を開始し、本社は隣接する社村小山谷に置かれた。

松島は複数の事業を経営し、織物王国福井の発展に寄与したが、創業から4年後の大正9年に病没した。このため、福井紡織は名古屋の服部商店と合併し、「服部商店福井紡績工場」となった。同商店は明治27年

の創業で、大正元年に法人化し、問屋業から織布業、紡績業へと進出して事業を拡大していた。この合併は、双方にとって合理的な判断だった。

工場は拡張整備が進み、敷地は約1万坪、建物は53棟、織機は860台を数え、従業員も900名を超える大規模工場へと成長した。その後も増改築が行われ、昭和15年2月に社名を「興和紡績」に変更し、引き続き福井工場として稼働した。しかし、戦局の悪化に伴い企業整備や軍需産業への転換を余儀なくされる。

昭和17年10月、工場は日本国際航空工業(株)(本社東京)に買収され、同社の福井工場(後に福井製作所)に

改称)となった。この工場は、同社の京都製作所(久遠山町)とともに、軍用航空機の部品、特にプロペラの生産を担った。

翌昭和18年には、春江町の12の織物工場も福井製作所春江分工場として整理された。これらの工場では、学徒動員された若年者も多数働き、市民にとって忘れがたい存在となった。しかし、昭和20年7月の福井空襲で被災し、さらに敗戦によって日本国際航空工業福井製作所が復活することはなかった。跡地は熊谷組の買収などを経て、官民一体となった福井紡績(株)(現フクイボウ(株))が設立された。(文 奥山秀範)